　二股台場の戦いについての文献記録は、旧幕府軍側・新政府軍側を併せ数多く遺るが、両軍記録ともに自軍視点での記述に偏りがちである。旧幕府軍側は対陣した新政府軍側の陣容に不正確な点が見られ、また戦果についても過大評価のきらいがある。また新政府軍側は各藩の出陣記録が主であり、個別詳細については事実に近しいものの、軍の全容についての総合的な記述に乏しい。

　以下は、それらを総見・整理し、二股台場の戦いにおける両軍の陣容および戦闘経過についての整合・把握を試みたものである。文献出典は適宜括弧書きにして記載する（括弧中［幕］は旧幕府軍側文献、［新］は新政府側文献）。

1．新政府軍の乙部上陸から二股口進撃まで

明治2（1869）年４月６日（新暦5月14日）、新政府軍は青森を進発し、4月9日（新暦5月17日）、乙部に上陸。軍を二手に分け、一方は海岸より松前方面、うち一方は江差より山中を抜き函館平野・五稜郭へ攻め入るべく進軍を開始する（［新］『戦争御届書』（松前藩）『戊巳征戦記略』（長州藩）『阿部正桓家譜』（福山藩））。この時の新政府軍の陣容は以下の通り。

　松前藩：1中隊（一番小半隊・二番厚田清隊からなる中隊）総長・松前右京、軍事方・松崎多門（『戦争御届書』）

　長州藩：2中隊＋半砲隊（第二中隊・第三中隊・第二半砲隊）軍監・駒井政五郎（『戊巳征戦記略』）

　福山藩：2中隊＋砲隊（一番中隊・三番中隊・砲隊）副総督・堀兵左衛門、軍監・関新五左衛門（『阿部正桓家譜』）

　幕末当時の軍制に照らし合わせおおよそ500から600名の陣容となり、これは二股台場において新政府軍を迎え撃った旧幕府軍側の記録における見立てと合致する（［幕］『南柯紀行』『説夢録』『北洲新話』『戊辰戦争見聞略記』『函館戦記』）。

　新政府軍進撃の報は4月9日のうちに五稜郭の旧幕府軍本陣にもたらされ（［幕］『中島登覚え書』『函館戦記』『衝鋒隊戦争略記』）、これを迎え撃つべく、旧幕府軍は間道途上・二股の地に軍を進め、４月12日までの間に迎撃のための胸壁（塹壕）を築く（『北洲新話』には「春来築きしもあり」との記述もある）。これが、現在も遺る現・台場山の塹壕群、下二股台場である。

　この際築かれた胸壁の数については、旧幕府軍側の文献のうち『蝦夷之夢』『北洲新話』『蝦夷錦』『函館戦記』にあるがいずれも16か所である。種別詳細について記録があるのはこのうち大野右仲の『函館戦記』であるが、それによれば「山巓と半腹とに築くものは十一。河岸に築くもの三。広くして大なるもの二。道を挟んで築き、昼夜督役せしかば二日にして成る」「伝習歩兵隊をして右の山の諸壁を守らしめ、衝鋒隊をして左の山と河岸とを守らしむ」とある。また新政府側の戦闘記録中にも「左右山手」（『津軽承昭家記』（弘前藩））「左半隊ハ山手右道ヲ相固、右半隊ハ正面ニ相懸…」（『薩摩出軍戦状』（薩摩藩））など、道即ち旧間道を挟む台場山の高峰・低峰に分散して塹壕が築かれていたと読みとれる箇所があり、これは現在既知の山嶺上の遺構分布と合致する。ただし大野の記述における「河岸に築くもの三」「広くして大なるもの二」、『蝦夷之夢』『函館戦記』における第二次会戦の戦闘中に新政府軍に奪取された山嶺塹壕と河岸の兵とに旧幕府軍の塹壕が挟み撃ちを受ける描写などから見えるように、山嶺塹壕のほか二股河岸にも塹壕が構築されていた可能性が高いが、こちらについては未発見である。

　旧幕府軍はこのほか、「官軍の動静を伺はす」（［幕］『函館戦記』）ために下二股よりおよそ一里にある「天狗岩」にも胸壁を築いた。この際築かれた壁数については、旧幕府軍側記録には3か所（『函館戦記』）ないし4か所（『蝦夷之夢』『北洲新話』）の2通りの記録がある。なお、新政府軍側・長州藩の『戊巳征戦記略』には「…中二股ノ賊壘三所ヲ撃破シ…」との記録がある。また「天狗岩」の現在地についてであるが、おそらくは現在の北斗市に所在する天狗岳が該当すると考えられるが、松前藩の記録では「天狗嶽（岳）より八・九町隔てた『三枚嶽』と申す山の半腹」（『戦争御届書』）とあることを付記しておく。

これらの胸壁群を守った旧幕府軍の初期陣容については、凡そ以下の通りである。

陸軍奉行並・土方歳三（市ノ渡宿陣）

同　添　役・大野右仲

　　　　　　大島寅雄（出陣時、開戦時は五稜郭に）

陸軍改役下役・アルテュール＝フォルタン

衝鋒隊 二小隊（頭取・友野栄之助・川井卓郎（卓太郎）、指図役・小和野昌太郎）

伝習歩兵隊一小隊（頭取・中根量三）

砲兵隊

工兵隊：（隊　長・吉沢勇四郎）

これを幕末軍制に照らせば、『衝鋒隊戦争略記』『函館戦記（大野版）』における「百三十人余」という兵数とおおよそ合致する。この2文献は実際に二股口防戦にあたったメンバーの聞き取りあるいは実録によるものであり、信憑性も比較的高いものと考えられる。

2．天狗岩の前哨戦と第一次会戦（旧暦明治2年4月13日～14日）

4月13日（新暦5月24日）午後3時ごろ（［幕］『北洲新話』『函館戦記』）、長州藩・福山藩・松前藩が天狗岩の旧幕府軍陣地へ襲来（［新］『戊巳征戦記略』『阿部正桓家譜』『戦争御届書』）。天狗岩に新政府軍迫るの報はすぐさま後陣・下二股台場へと伝わり、北側峰の胸壁群には伝習歩兵隊、南側峰と河岸の胸壁群には衝鋒隊が伏せ来襲に備える（［幕］『衝鋒隊戦争略記』『函館戦記』）。

　このとき土方歳三は市渡に宿陣していた（［幕］『中島登覚え書』『函館戦記』）ため、報せの早馬が発せられ（［幕］『函館戦記』）、これを受けて土方もすぐに出陣、指揮にあたる（［幕］『島田魁日記』）。

　新政府軍は、主力が天狗岩陣地正面から攻撃するところを長州藩の別働隊が山上から回り込み旧幕府軍を挟撃（［新］『戦争御届書』（松前藩）『阿部正桓家譜』（福山藩）**[幕]**『北洲新話』）、同地の胸壁３ヶ所は全て陥落する（［新］『戊巳征戦記略』（長州藩）など）。旧幕府軍は撤退すると同時に、新政府軍を下二股方面へと誘導しはじめる（［幕］『蝦夷之夢』）。

　新政府軍は勝ちに乗じ進軍、夕刻頃に下二股へと到達する。対して守る旧幕府軍は息を潜め陣近くまで敵を誘い込み（［幕］『衝鋒隊戦争略記』『函館戦記』）、機を見て各胸壁から一斉に攻撃。新政府軍は一時怯むも、すぐに反撃を開始。下二股における第一次会戦の火蓋が切られる。

　兵数に勝る新政府軍の攻撃は熾烈を極めた。一方、兵力に劣る旧幕府軍であったが、台場山尾根に沿って展開された胸壁群による防衛線上を敵が攻める場所に応じて移動して守る戦術を基本とし（［幕］『函館戦記』）固く守る。日没とともににわかに激しい雨が降り出し（［新］『戊巳征戦略記』（長州藩）、［幕］『蝦夷之夢』『島田魁日記』『函館戦記』『北洲新話』）、水濡れによる不発を防ぐため弾薬を懐で温める（［幕］『函館戦記』）など、雨中での苦闘となる。

両軍ともに疲弊する中、戦況の打開のため、別働隊による奇襲作戦が土方歳三により立案される（［幕］『函館戦記』）。その任に当たったのは頭取・友野栄之助率いる衝鋒隊半小隊25名（［幕］構成要員は『蝦夷之夢』、人数は『北洲新話』『函館戦記』より）。午後10時ごろに進発し、沢に沿って進み河を渡り、険しい山を越えて新政府軍の背後に廻りこむ。このときすでに空は白みかけていた（［幕］『蝦夷之夢』『函館戦記』）。奇襲の成果については表現が文献によってまちまちである。『蝦夷之夢』ではこれにより新政府軍が総崩れになったとあるし、『函館戦記』では別働隊到着時にはすでに新政府軍が撤退を始めた後であったと記す。いずれにせよ4月14日（新暦5月25日）早朝、前日の午後3時よりのべ16時間に渡る戦闘の結果、新政府軍はついに下二股を抜くことができず撤退する。

　この会戦における旧幕府軍の損害は伝習隊士官・杉山清介が戦死、負傷者は文献によりばらつきがあるが3～5名（［幕］『蝦夷之夢』『北洲新話』『苟生日記』内フォルタン書簡）。新政府軍の損害は戦死者3名・負傷者10名（松前藩・戦死者1名重症2名（軍事方・松崎多門含む）負傷者2名、長州藩・戦死者1名負傷者4名、福山藩・戦死者1名負傷者2名。［新］『松前藩戦争御届書』『戊巳征戦記略』『阿部正桓家譜』）。

　昼夜間断なく銃撃戦が続いたことにより、旧幕府軍の費やした銃弾数は35,000発に及び（［幕］『蝦夷之夢』『説夢録』『北洲新話』『蝦夷錦』、［新］『維新**戦役実録談**』）、発砲の硝煙により将兵の顔は真っ黒であったという（［幕］『南柯紀行』『苟生日記』内フォルタン書簡）。一方新政府軍側も、撤退した後の戦場には同軍の主力銃であった元込め式であるスペンサー・スナイドル銃の弾薬の「ドース（doos、オランダ語で「箱」）」や「パトローン（patroon、オランダ御で「薬莢」）」が山のように散乱していたという（［幕］『説夢録』『蝦夷之夢』）。このほかにも新政府軍は機材を現地に残し撤退したようで、旧幕府軍は多くの鹵獲品を得ている（［幕］『衝鋒隊戦争略記』『北洲新話』『中島登覚え書き』）。

3．戦線の膠着と両陣営の増援（旧暦明治2年4月15日～22日）

　第一次会戦後、新政府軍は後陣・稲倉石まで撤退（［新］『松前藩戦争御届書』『戊巳征戦記略』、［幕］『南柯紀行』）したのち、再び一部の兵を中二股（天狗岩）に進め（［新］『戊巳征戦記略』、［幕］『函館戦記』『新開調記』）旧幕府軍と対陣する。この後4月15日～23日（新暦5月26日～6月3日）の間は、双方斥候による偵察や威嚇射撃（［幕］『函館戦記』）または小規模な戦闘（新政府軍の夜襲。4月16日・17日の2度あったという、［幕］『中島登覚え書』）などがあるも大規模な戦闘には至らなかった。

　この間、旧幕府軍側には酒井兼三郎・秋山繁松（衝鋒隊）が仙台脱藩・見国隊１中隊、頭並・大川**正次郎**が伝習歩兵隊本隊を率い合流（［幕］『衝鋒隊戦争略記』）。新政府軍側も4月18日（新暦5月29日）に岡山藩一中隊・薩摩藩一中隊・徳山藩一中隊が鶉村へ二股口方面への援軍として到着（［新］『岡山藩記』（岡山藩）『**薩摩**出軍戦状』（薩摩藩）『太政官**日誌**』）するなど、両軍ともに増援を加え戦線の緊張は高まりつつあった。

4.第二次会戦（旧暦明治2年4月23日～25日）

　4月23日（新暦6月4日）、偶発した旧幕府軍斥候と新政府軍との交戦をきっかけとし（［新］『阿部正桓家譜』）、夕方頃より新政府軍が下二股への攻撃を開始。第二次会戦が勃発する。この時の新政府軍の陣容は以下の通り。

　松前藩：1中隊（一番小半隊・二番厚田清隊からなる中隊）総長・松前右京（『戦争御届書』）

　長州藩：2中隊＋半砲隊（第二中隊・第三中隊・第二半砲隊）軍監・駒井政五郎（『戊巳征戦記略』）

　福山藩：2中隊＋砲隊（一番中隊・三番中隊・砲隊）軍監・山岡運八、関新五左衛門（『阿部正桓家譜』）

　岡山藩：1中隊（精鋭隊）隊長・岩田七郎兵衛（『岡山藩記』）

　徳山藩：**1中隊**（献功隊）（『毛利元功家記』（徳山藩）『維新**戦役実録談**』）

　弘前藩：2小隊、隊長・米橋左太夫、浅利萬之助（『津軽承昭家記』（弘前藩））

　薩摩藩：１中隊（三番兵具隊）（『**薩摩**出軍戦状』）

（※このほか水戸藩の1中隊が4月24日に二股口方面軍として鶉村に派遣されている（『太政官日誌』）が下二股での戦闘には参加していない）

　幕末兵制から換算して投入兵員総数はおおよそ1,000名と推定されるが、後述の通り戦闘経過に応じ逐次兵員の投入・交代を行っているため、同時展開兵力は500～800名程度と考えられる。一方、旧幕府軍側の陣容は第一次会戦時の兵員に増援およそ150名を加えた300名（のち援軍が加わり400名）程度であった。

以下、各記録を元に時系列で戦闘経過を追うこととする。

4月23日夕刻（午後5時ごろ）、長州藩・福山藩、および岡山藩の１小隊（半隊）が下二股への攻撃を開始する。この時の攻め手側の総兵力はおおよそ500名程度と推定される。全面において長州藩が主力を務め、福山藩は右翼（台場山低峰側）・正面、岡山藩は間道をはさみ左翼（台場山高峰側）に展開（［新］『戊巳征戦記略』『岡山藩記』『阿部正桓家譜』）。さらに午後８時、岡山藩が半隊を戦線に追加投入（［新］『岡山藩記』）。午後１１時には弘前藩が到着し、米橋左太夫小隊が福山藩のうち正面を攻める小隊と、浅利萬之助小隊が長州藩のうち左翼を攻める小隊とそれぞれ交代し（［新］『津軽承昭家記』）、徹宵での攻撃が続いた。一方旧幕府軍側は土方歳三指揮・大野右仲補佐のもと、高峰側陣地と街道沿いを大川正次郎率いる伝習歩兵隊、低峰側・河岸陣地を大島寅雄・酒井兼三郎・小和野昌太郎・川井卓郎・友野繁ノ助らの率いる衝鋒隊が守り防戦にあたり（［幕］『函館戦記』『北洲新話』『衝鋒隊戦争略記』）、併せて五稜郭へ救援の要請を行っている（［幕］『北洲新話』）。

翌4月24日午前10時ごろ、旧幕府軍・瀧川充太郎が伝習士官隊を率い合流。即座に新政府軍への突撃を敢行する（［幕］『蝦夷之夢』『衝鋒隊戦争略記』『説夢録』『北洲新話』『蝦夷錦』『函館戦記』、［新］『津軽承昭家記』）この突撃は新政府軍の指揮にあたり前線で督戦していた長州軍監・駒井政五郎を負傷（のち死亡）せしめ戦線を一時押し下げることに成功するが（［幕］『蝦夷之夢』『説夢録』『北洲新話』『蝦夷錦』、［新］『維新**戦役実録談**』『戊巳征戦記略』『山口藩忠節事蹟』）、士官隊士のうち遠藤銀之助（森蔵）・小田練次郎・林寅之助ら**が**討ち死に（［幕］『蝦夷之夢』『北洲新話』『説夢録』）するなど旧幕府軍側の被害も少なくないものであった。また同日正午には薩摩藩が到着し正面・右翼に兵を展開（［新］『**薩摩**出軍戦状』）、午後２時にはさらに松前藩が合流し薩摩・福山・弘前とともに山の半腹を攻め始め（［新］『松前藩戦争御届書』）、新政府軍側の兵力は推定800名と旧幕府軍の倍に達するほどとなり、この頃には瀧川の突撃による優勢は押し戻されている（［新］『津軽承昭家記』、［幕］『蝦夷之夢』『衝鋒隊戦争略記』『北洲新話』『函館戦記』。『蝦夷之夢』『函館戦記』などに見える大川正次郎による滝川の蛮勇に対する叱責と土方による仲裁の逸話はこれに前後して起きたものであろう）。

この後同日夕刻には徳山藩も到着し、岡山藩と合流し攻撃を開始（［新］『毛利元功家記』）、新政府軍の展開兵力は最大に達する。日没前後には長州藩・薩摩藩により下二股台場の一角（軍配置から見て低峰側と推定される）が奪取され（［幕］『蝦夷錦』『北洲新話』『蝦夷之夢』『函館戦記』［新］『津軽承昭家記』）、旧幕府軍が一時混乱するも大川正次郎（［幕］『蝦夷之夢』）・大野右仲・土方歳三（［幕］『函館戦記』）が督戦し軍を律し戦線を維持する。

　おおよそ二昼夜に渡る銃撃戦は、連射により熱を帯び構えることすら難しい銃身を桶の水で代わる代わる冷やしながら行わねばならなかった（［幕］『蝦夷之夢』『北洲新話』）ほど激しいものであったが、4月25日午前0時頃に松前藩が疲弊激しく撤退（［新］『松前藩戦争御届書』）したのを皮切りに同日午前2時～3時ごろに撤退命令が発せられ（［新］『戦争御届書』『岡山藩記』『**薩摩**出軍戦状』）、新政府軍が軍を退き幕を閉じる。午前４時頃までには天狗岳（上二股）に帰陣し（[新]『岡山藩記』）、追撃した旧幕府軍の小勢が午前6時ごろ天狗岳に進むも迎撃され撤退（［新］『**薩摩**出軍戦状』）。以上をもって二股口での戦いは終焉を迎え、ついに新政府軍は二股を抜くことはできなかった。

　旧幕府軍の損害は戦死者が忠内次郎蔵・杉山清助・遠藤銀之助・小田練次郎・林寅之助・石川周司・石川益太郎・弥三郎ら９名（［幕］『蝦夷之夢』『北洲新話』『蝦夷錦』『説夢録』）、負傷者が須田金次郎・高橋巳之吉・山本善吉・滝野弥太郎ら17名（［幕］『蝦夷之夢』『北洲新話』）。新政府軍側の損害は戦死者8名・負傷者49名（松前藩・戦死者１名負傷者3名、長州藩・戦死者2名（軍監駒井政五郎含む）負傷者8名、岡山藩・戦死2名（精鋭隊隊長岩田七郎兵衛含む）負傷14名、福山藩・　戦死2名・負傷12名、弘前藩・負傷10名、薩摩藩・戦死者1名・負傷者2名。［新］『戦争御届書』『戊巳征戦記略』『岡山藩記』『阿部正桓家譜』『津軽承昭家記』『**薩摩**出軍戦状』）であった。

5.旧幕府軍の下二股台場撤退まで（旧暦明治2年4月26日～5月1日）

　下二股での第二次会戦以降、同方面での戦闘は行われなかった。『蝦地追討記』によれば鶉村には4月26日時点でなお800の新政府軍の兵が配されていたが、安野呂方面へ弘前藩兵100名がむかっており、別ルートによる攻略への注力が進んだものと考えられる。

　4月29日（新暦6月10日）夕刻、旧幕府軍の港湾防衛の要であった矢不来における敗戦および新政府軍が有川に進撃しさらに二股の後背・市渡をうかがうとの報が下二股に届く（［幕］『蝦夷之夢』『衝鋒隊戦争略記』『説夢録』『函館戦記』）。ここに及び土方歳三をはじめ諸将は下二股台場の放棄と撤退を選択し、翌30日早暁、五稜郭へと兵を退く（［幕］『南柯紀行』『蝦夷之夢』『衝鋒隊戦争略記』『説夢録』『函館戦記』『蝦夷錦』『北洲新話』『中島登覚え書』）。翌5月1日12時、旧幕府軍が撤退したとの報せを住民から受けた岡山藩・薩摩藩・水戸藩の兵が下二股台場まで進み台場の放棄を確認（［新］『岡山藩記』）、これらに長州藩・福山藩・松前藩を加えた各藩が大野村まで進軍し（［新］『戦争御届書』『戊巳征戦記略』『岡山藩記』『阿部正桓家譜』）、箱館戦争は最終盤を迎えることとなる。